

映画『細雪』見比べ記（桜の開花を迎えて）

上原 昇（2組）

桜の開花時期となったが、残念ながら今年もマスク越しのお花見になりそうだ。桜と言えば、映画『細雪』の中での、京都平安神宮の華麗な紅枝垂桜が思い出される。原文では「・・・此の神苑の花が洛中に於ける最も美しい、最も見事な花」と。映画の世界では、一つの小説を何度も作品化（リメイク）することがよくある。川端康成の「伊豆の踊子」などはこれまで6度、映画になっている。前述の「細雪」（谷崎潤一郎原作）も過去3回映画化されているが、この度、その3作が一挙上映され、続けて観る機会があった。（3/5～3/25、神田の神保町シアターで、『「細雪」と映画の中の姉妹たち』特集）以下簡単に、3作を時代順に紹介してみたい。

1. 1950年（昭和25年）、新東宝版『細雪』（監督：阿部豊）

原作が刊行されたのが昭和21年から22年というから我々が生まれた頃である。本作は、小説の発表から間もなくの映画化で、物語の時代設定（昭和10年代）と



も近く、当時の様子を一番反映しているようだ。主人公の四姉妹役女優も、花井蘭子、轟夕紀子、山根寿子、高峰秀子と我々世代には遠い顔ぶれだ。

当時売れっ子スターの高峰が大阪船場のこいさん（末娘）役を演じているが、関東育ちの高峰には関西弁の台詞はちょっと厳しそうである。

左は轟、右は高峰（当時26歳）

2. 1959年（昭和34年）、大映版『細雪』（監督：島耕二）

1作目から約10年後、大映のスター女優を集めて作ったのがこの2作目。京マチ子（次女役）も山本富士子（三女役）も関西と縁があるので、安心して観ることができる。その後、大映は不振に陥り、1971年に倒産してしまうが、当時は映画の黄金時代で、こうした大作をどんどん世に送り出していた。

1950年版では次女役を演じていた轟夕紀子が、本作では長女役を演じているの



がおかしい。

右から京（当時 35 歳）、山本（＼ 28 歳）、四女役の叶順子（＼ 23 歳）

3. 1983年（昭和58年）、東宝版『細雪』（監督：市川崑）



第2作から4半世紀後に作られた3作目は、市川崑がメガホンをとって、岸恵子、佐久間良子、吉永小百合、古手川祐子と各世代で最も美しい女優をキャスティングしたという話題作で、筆者も本作だけは公開当時に観ている。

俳優の使い方や物語作りはさすが市川監督で、映画の完成度は群を抜いている。公開から40年近く経った今、90歳の岸をはじめ四姉妹（女優）とも存命である。

冒頭記した桜の花見シーンを今回再見し、改めて堪能した次第。

右から三女役の吉永（当時 38 歳）、次女役の佐久間（＼ 44 歳）、長女役の岸（＼ 50 歳）、四女役の古手川（＼ 23 歳）

今回、時代を超えた映画『細雪』三作を通じ、当代の美女11名（一人は複数役を）をスクリーンで目にすることが出来たのは嬉しい体験であった。

今後、映画『細雪』第4作目も期待したいところだが、当時の舞台設定や演ずる役者のたたずまいなど考えると、「昭和も遠くなりにはけり」で難しそうである。

（2022年3月25日記）

以上